

外に新田一萬石を加算し、且つ加賀藩より米二萬俵を興へることとして、十萬石の待遇を受け、天保六年十二月十六日侍從に任ぜられ、七年十二月十日大聖寺に卒し、廿五日發喪した。享年五十二。法號篤念院温山良潤大居士。實性院に葬る。利之字は濟民、居處を三寶館・敬事堂・冥鴻庵・白鳩軒と號した。

マヘダトシシゲ 前田利重 ↓マヘダトシナホ 前田利直。

マヘダトシズミ 前田利佳 ↓マヘダヨシヤス 前田慶寧。

マヘダトシタカ 前田利太 通稱宗兵衛・慶次郎又は慶次。諱は利卓・利益又は利治にも作る。前田利久の義子。生父は瀧川左近將監一益とも、瀧川儀太夫益氏ともいひ、又或は一益を利太の妻の兄とし、或は益氏の死後その妻の死めるが利久に再嫁して生んだ子であるともして、これ等の親族關係は明らかでない。利久は固より利太に家を繼がしめようとしたが、信長命じて利家を嗣たらしめた。是を以て利久の妻はその城を去るに臨み、利家を調伏しようとしたと傳へる。後に利家の金澤に治するに及び、利久父子來りて之に仕へ、利太は六千石(又五千石に作る)を受けて越中阿尾城を預つたが、獨介不綱自ら操行を修めず、天正十八年出走して京に上り、次いで上杉景勝に會津に仕へて二千石を食み、關原の戦後上杉氏の封を削られた時浪人となり、慶長十年十一月九日大和布に於いて七十三歳を以て歿した。或は會津田畑村百姓大隅の家で終つたとするものもあるが、前説が正しいやうである。利太の嫡男を正虎といふた。三女、一は利長に仕へてお花の方と稱

し、後有賀左京に嫁し、又大聖寺藩士山本彌右衛門に再嫁した。一は北條主殿の室となり、一は富山藩士戸田彌五左衛門方經に嫁した。

マヘダトシタカ 前田利孝 加賀藩祖前田利家の五男。母は明連院。文祿三年金澤に生まれ、慶長九年江戸に至つて養母芳春院に隨從し、十八年八月十日從五位下大和守に叙任。

十九年六月芳春院は金澤に歸つたが、利孝尙江戸に留り、十月徳川秀忠に隨うて大坂城を征し、十一月岡山に陣して川口の援に當り、翌元和元年の役には前衛に屬した。秩祿初は幕府から千人扶持、加賀藩から二千扶持を受けたが、二年十二月廿六日功に因つて上野甘樂郡内一萬四千石に封せられて諸侯に列した。享年四十四。駒込吉祥寺に葬る。法號は慈雲院眞翁宗智大居士。

マヘダトシタダ 前田利忠 加賀藩臣。通稱日向。萬里小路充房の子。母は前田利家の女嫁阿姫。利忠前田氏を冒して利長に仕へ、祿五千石を受け、寛永十三年五月歿。養子日向好廣、初諱辰正、遺知を襲ぎ、同二十年八月歿。利忠遺腹の子木工之助忠辰襲ぎ、三千三百石を受け、寛文四年九月廿一日歿し、嗣なくして断絶した。

マヘダトシタネ 前田利物 大聖寺藩主第七代。利道の三男、母は圓成院。寶曆十年正月十七日大聖寺に生まる。幼名虎次郎、後主水。天明二年兄利精の致仕しようとした時、その子利考尙幼であつたから利物を嗣とせんことを請ひ、七月十八日之を許された。利物乃ち八月十八日江戸に着し、同月廿一日家督を相続し、十二月十八日從五位下美濃守に叙

任した。八年九月廿七日江戸に卒し、十一月五日發喪、享年廿九。法號覺成院通峰紹玄大居士、實性院に葬る。

マヘダトシチカ 前田利見 ↓マヘダシゲノブ 前田重晴。

マヘダトシツグ 前田利次 加賀藩主前田利常の二男。母は天徳院。元和三年四月廿九日金澤に生まる。幼名千勝丸。七年江戸に至り、寛永八年十二月廿二日元服、同月廿七日從四位下侍從に叙任、淡路守と稱し、松平氏を冒し、十六年六月二十日利常から越中婦負郡一圓、新川郡浦山邊・富山邊、加賀能美郡内、合計十萬石の分知を受け、城地を婦負郡百塚に定めて百塚侍從といはれ、十七年十月入部、假に富山(この時富山は未だ領内になかつた)に居り、萬治三年舊領能美郡内及び新川郡浦山邊を富山附近に代へ、改めて富山を居城と定め、寛文四年四月初めて領知判物を受け、延寶二年七月七日江戸城支關で頓に發病、尋いで卒した。年五十八。婦負郡長岡に葬り、富山光嚴寺を菩提所とした。法號龍光院瑞巖良將大居士。後大正六年十一月十七日正四位を追贈せられた。

マヘダトシツグ 前田利嗣 幼名多慶若、字は惟永、梅開・育峰・菊皇・柳莊の號がある。父は加賀藩主第十四代慶寧、母は久徳氏。安政五年四月十九日金澤城に生まれ、明治元年夏幼名を改めて利嗣と稱した。二年二月四日從五位下筑前守に叙任、即日從四位下左近衛權少將に進み、筑前守故の如くであつた。慶應の後四年十一月米・英兩國に遊び、六年十二月歸朝。七年五月父の後を承けて家を襲ぎ、十七年七月七日侯爵を授けられ、二十年十二

月廿四日從三位に陞叙、廿一年十二月廿五日主獵官に任じ、廿二年二月再び米歐を周遊、廿三年四月歸朝、十一月貴族院議員に列し、廿七年五月三十日主獵官を辭し麝香間祿候に任じ、廿九年六月廿二日勳三等に叙し、旭日中綬章を授かり、三十年七月二日正三位に叙し、三十三年六月十四日從二位に陞り、勳二等瑞寶章を賜はり、即日薨去。歳四十三。諡して淳正公といひ、神式を以て東京府下日暮里の塋域に葬られた。その歌集に淳正公家集・淳正公和歌留・淳正公四季歌集・殘齋がある。

マヘダトシツネ 前田利常 加賀藩主第三代。利家の四男。母は壽福院。文祿二年十一月廿五日金澤に生まれた。幼名は猿千代。初め老臣前田長種に育養せられて越中守山城に居り、慶長三年利家の上州草津温泉から歸つて途今石動に宿した時、猿千代は初めてこれに謁した。五年九月利長の小松城主丹羽長重と和した際往きて質となり、翌月長重は封を失うたが、猿千代尙そこに留り、長種はその城代になつた。當時猿千代は既に兄利長の世嗣たることに内定してゐたが、六年初に至つて公表せられ、九月犬千代と改め、諱を利光といひ、同月徳川秀忠の女珠姫を金澤城に迎へて之と婚した。十年四月秀忠征夷大將軍に任ぜられ、利光は利長に從うて京師に赴き之を賀し、同月八日從四位下侍從に任じ、筑前守と稱し、松平氏を冒すことを許され、六月廿八日利長致仕の後家を襲いだ。十九年五月利長の薨じた時、關老土井利勝は秀忠の旨を受けて駿府に到り、利光をして利長の遺領越中新川郡一部を領せしむべきや否やに就いて家康の指令を請うた。蓋し利長の養老封は分